

①ディレクトフォース

ディレクトフォースでのお話の中で、私が最も印象に残っているのは「総合商社の在り方」についてだ。各グループごとの話の際に聞いたことなのだが、総合商社は日本にしかない、ということに興味を覚えた。どうして総合商社は日本独自のものなのだろうか。その問いに対する答えとして挙げられるのは、日本が農耕民族だから、だそうだ。日本では古来より集落や村単位で協力して農耕を行ってきた。稲の栽培に詳しい者、田畑の管理に詳しい者、それぞれが自己の能力を生かし助け合うことによって生活を成り立たせてきたのである。この姿勢は、現在の三菱商事にも受け継がれており部署ごとの情報を共有することによってビジネスを広げているらしい。一方、外国では情報や技術を共有するという思考が元々無いためか、総合商社を作っても経営が成り立たずに倒産してしまったとの話を聞いた。情報はオープン、企業内の透明性を重要視することが大切だ、と話して下さった。また、グローバル化が進むなかで私たちに大切にしてほしいこととして挙げられるのが、日本の歴史や正しい日本語を学ぶこと。そして日本人であることに誇りを持つことだ。日本人のなかには自国の歴史を知らない人が多く存在する。日本について話して、と言われても説明に困る人が多いそうだ。自国について知らなければ、当然、他国について知ることなど到底出来ないだろう。それに加え、正しい日本語を用いることの出来ない人の増加も深刻な問題だ。言葉の乱れが指摘される現代社会で、正しい日本語を使いこなせることは重要なことだと思うのである。

また、日本の技術力や仕事に対する姿勢は世界でも高い評価を受けている。お話いただいた「あかせきれい」もその一つだ。「あかせきれい」とは、安全、確実、清潔、規律、礼節、の頭文字をとったものだ。初めて聞く言葉だったが、三菱商事の方々と実際に話す機会を頂けたことで身をもってこの言葉の意味を感じることが出来た。今回、貴重なお話を伺うことができ自分の視野を大きく広げることができた。物事をある一面からだけ見るのではなく、多面的に見ることの重要性を改めて感じられこのような経験をさせて頂けたことに感謝したいと思う。

②企業大学訪問

私たちは企業大学訪問で筑波大学附属小学校を見学させていただいた。筑波大学附属小学校は、日本初の師範学校の練習校として創立され140年以上の歴史を持つ伝統校である。また、片平克弘校長は仙台二高のOBである。筑波大学附属小学校の先生方は、今回の訪問を快く受け入れて下さった。

まず、筑波大学附属小学校の校内を見学して思ったことがある。それは生徒が書いた毛筆やレポートなどの完成度が高いことだ。どの生徒の字も丁寧で、要点ごとにととても分かりやすくまとめられていた。6年生の男子生徒が自主的に作成した「切手でたどる日本の歴史」には、各年代ごとの絵が描かれた切手とその解説文、年号などが細かく記されており、5年生の生徒が作成した社会科の「気象による住宅の造りの違い」や「メダカの観察記録（スケッチを含む）」なども、1つとして同じものはなく趣向を凝らしたものとなっていた。これ以外にも各教室には生徒たちが作った掲示物が壁一面に貼られており、クラスカラーが出ていて印象的だった。

また、筑波大学附属小学校は運動にも力を入れている。山梨県の清里での登山やスキー教室などがあげられるが、特に目を見張ったのは遠泳と運動会だ。6年生は毎年、豊浦で2kmの遠泳を行い全員が完泳する。この遠泳のために、1年生の夏休みからプール教室が行われるのである。私たちが見学させていただいたのは3・4年生のクラスだったのだが、ほとんどの生徒が25m以上をクロールと平泳ぎで泳げており、継続は力なり、という言葉の思い起こさずにはいられなかったほどだ。また、運動会では去年、組体操が行われたのだが私たちがマスゲームで取り組んでいる「帆掛け船」を小学1年生から6年生までの全員が完璧に完成させたという。お話を伺った社会科教員の梅澤真一先生は「知・徳・体の一致」の大切さを挙げられており、小学生の真摯に練習に取り組む

姿勢に感心させられた。

私たちが訪問した際には、ちょうど国語教育研究会というものが開かれており全国から集まったおよそ 4000 人もの国語科の教師の方々が講堂で授業についての議論を交わしていた。この時の題材は 2 年生の物語文「ミリーのすてきなぼうし」だった。この作品は、帽子が欲しいがお金がない小学生のミリーに、帽子屋の店長さんが「想像のぼうし」をプレゼントする物語。授業を行った青木先生に対し、様々な意見が飛び交っていた。青木先生は「文学的文章を読む活動を通して論理的思考力を育むためには、作品全体を丸ごと読む必要がある。」とし、こうした読み方を「フレームリーディング」と名付けている。この「フレームリーディング」の切り口は、数を数えることや、「一番〇〇な〇〇は？」などの選ぶことであるという。私たちが小学生の頃とは違った教えかたに、実際にフレームリーディングを用いた授業を是非拝見したい、と感じた。

最後に、梅澤先生に質問をさせていただいた。様々なことを答えていただいたのだが、ここでは主に 3 つの質問について書きたいと思う。まずは、「教師を目指すにあたって必要なことは？」という問いだ。梅澤先生は、コミュニケーション力と、多様な価値観を持つことが大切だとおっしゃっていた。「教師というのは対人間の仕事で、自分と違う考えを持つ人と接することも多い。それを否定せずに積極的に取り入れる姿勢を持つことが大切。」という梅澤先生の言葉からは、海外への教育指導の経験が感じ取れ納得させられた。次は「子供たちに最も伝えたいこととは何か？」という問いである。梅澤先生は人の話を聞くことと、やるべきことはやることの 2 つを挙げ、自主性や自律の大切さについて話して下さった。子供たちがこれらを出来るようになるには達成感や成功体験を得ることが一番の近道であるという。子供は機械ではないため、意欲の持たせ方が重要なのだそうだ。実際、筑波大学附属小学校の生徒たちは授業の際にはほぼ全員が手を上げるといふ。活躍の場を与え、自信をつけさせることこそが大切なのだ。そして 3 つ目は「ICT の活用についてどのように考えるか？」だ。私の中学も大学の附属校であり、大学からタブレット端末や 3D プリンタ、また小型のパソコンを借りて技術やプログラミングの授業を行っていた。そのため、筑波大学附属小学校では ICT についてどのような考えを持っているのかを知りたかったのだ。梅澤先生は、「タブレットは一人一台完備している。有効に活用が出来るのであればしていきたいと考えていて、ICT 研究会ではそれらの活用に関心に取り組んでいる先生もいる」、とおっしゃられた。国語の研究会のため、ICT の研究室を見学するとは出来なかったのだが、これからの教育について聞くことができ、良かったと思う。

今回、筑波大学附属小学校を訪問したことで改めて教員の立場からみた教育現場を感じる事が出来た。今回得られた経験を生かし、自分の夢を叶えるために日々精進し、一層の努力を重ねていきたいと思う。

今回の訪問を受け入れて下さった筑波大学附属小学校の先生方には感謝してもしきれないほどだ。本当に素晴らしい体験をさせていただいた。



③OBOG による懇談会

懇談会では、現役の大学生から直接お話を伺うことが出来た。どの大学生の方のお話も魅力的で、食い入るように話を聞いていたと思う。色々な学部の方のお話を聞き、全ての方に共通する考えがあったように感じた。それは、「自分の意思を大切にすること」である。東大に入ることが必ずしも正解であるとは限らなく、自ら考えて決めることが重要である。何をどうやるのか、どうすべきなのか、自分に足りないことは何なのか。それらをきちんと自覚し、自分を見つめることでやりたいことはおのずと見つかってくるとおっしゃっていた。親や、先生の言いなりだけではやっていけない。浪人してその事を痛感した方もいたという。この懇談会を受けて、自分に不足していることを見つめなおす機会を頂いた。今何をすべきなのか、自分の意思をしっかりとって歩んでいきたいと思えた。